

## 言語副専攻制度の完成年度を迎えて

新野 守広

言語副専攻制度は2010年度に正式に全学に導入された。2013年度の本年は導入後4年目にあたる。この制度がスタートした時に入学した学生は4年生になった。いわゆる完成年度であるので、制度を振り返るという意味ではよい切れ目にあたる。そこで、現在言語教育科目構想・運営チームリーダーを務めている私が、以下、ごく簡単に言語副専攻制度を振り返りつつ、率直な感想を述べることにした。

私は全カリ導入後の2001年度後期に立教大学に赴任したので、カリキュラムの大幅な改定は2010年度から始まった新カリが初めてだった。このときの改革の目玉は、言語教育の必修単位の切り下げだった。具体的には、それまで英語の必修単位は8単位だったものが6単位になり、言語Bは6単位（文学部については8単位）だったものが4単位になった。言語教育の必修科目が言語A、Bともに一年生で終わることになったのである。グローバル化の進む今日、学生が社会生活で必要になる語学力や異文化対応能力を涵養するには、まったく足りない。これでは言語教育の放棄と批判されても仕方なかった。したがって、当然、必修科目を修了した学生に対してより高度な言語学習の場を提供することが議論になると思われ、実際、その通りになった。もちろん2010年度以前のカリキュラムでも、必修科目を終えた学生を対象により高度な言語学習の機会を提供するための多数の自由選択科目が開講されていたが、この自由選択科目をさらに

充実させ、科目相互の連携やスキルのより系統的発展のためのレベル化（英語：ステージ制の導入、言語B：基礎科目群、コア科目群の区分け）を行い、学生のモチベーションを持続的に引き出すよう設計されたのが、言語副専攻制度であると思う。

今「実際、その通りになった」とまるで当然のごとく事態が進んだように書いたが、現実には大変な毎日だった。新カリキュラムの設計以外にも、担当する教員の所属する新しい組織のあり方をめぐって大きな議論が起こった。この間の事情は、言語副専攻制度の具体的な設計と導入にあたってリーダーシップを発揮された初代言語教育科目構想・運営チームリーダーの谷野典之先生が書かれたエッセー『言語副専攻、な日々』（『大学教育研究フォーラム』16号、2011年）に詳しい。谷野先生の文章を読むと、2005年11月に「『全カリ第2ステージ』構想プロジェクト答申」が出て以後、2006年2月の部長会懇談会を経て、「全カリ第2ステージ、言語担当教員の所属に関するワーキンググループ」、「全カリ第2ステージと新組織（学部・学科）検討委員会」、「新学部新学科設置後の全カリ運営を検討する委員会」、「新学部設置準備室」などの諸委員会や組織が次々に立ち上がり、英語必修6単位、言語B必修4単位、副専攻16単位というカリキュラムの骨子と、現在の異文化コミュニケーション学部につながる新組織の骨子が出来上がった「激動の」日々が鮮やかによみがえる。

さて、このようにカリキュラムの面からも組織の面からも大きな改革を経て実現した言語副専攻制度だが、現在も学生の目線に立って運営上の細かい修正を重ねている。たとえば英語では、TOEFLやTOEICといった資格試験科目に学生の希望が集中し、抽選の結果、希望通りに科目を履修できない学生が続出したが、一人当たりの履修希望を申請できる科目数に枠を設けたり、開講時間帯を調整したりなどの工夫を施した結果、履修希望科目の集中はほぼ解消された。また、これまではステージごとの学習を積み重ねることに意義があるとの考え方から、必修科目修了後の2段階スキップを認めてこなかったが、2014年度からは必修科目修了後の2段階スキップを認めることになった。必修科目を修了した学生が基準点を満たせば、直接最上級のオナーズ・コースを履修できるようになるのである。

言語Bでは、副専攻制度導入に当たって、夏休みの海外言語文化研修をスタートさせた。ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語の各言語教育研究室がそれぞれ現地の大学とコンタクトを取り、夏季休業中に学生が海外に滞在して語学と文化を学ぶ科目を言語副専攻の一環としてプログラム化したのである。すでに同様の科目をスタートさせていた英語研究室、中国語研究室、諸言語研究室と相まって、全言語そろって夏季の海外言語文化研修が実施されることになった。言語副専攻を導入した成果として強調したいと思う。

さて、言語副専攻制度の修了者には、修了証を発行している。すでに旧カリ時代にも自由選択科目を履修してインテンシブコース（副専攻）の修了証の発行を受けた学生が何人もいたが、新カリの完成年度を迎え、さらに

多くの学生が修了証を手にするだろう。これを一つの励みとして、多くの学生が母語とは異なる言葉を学び、自文化のあり方を見つめ直して欲しいと思う。

にいの もりひろ

（本学異文化コミュニケーション学部  
教授/言語教育科目構想・運営チーム  
リーダー）